火葬まで

城戸祐介

（少なくとも一日は経ったとみてもいいわけだ）

田中は吐き捨てるように心の中でそう言った。といっても彼はまだそのように確信することは出来なかった。部屋の外の様子を見ることはかなわなかったし、そういう気にもなれなかった。あまつさえ田中は時間を確認し得なかった。彼が時計を壁に掛けていなかったというわけではない。ただ、今の体の状態では多くのことが不可能だったのだ。

早くも彼は自分の曖昧な予断に疑いを持つようになった。彼にしてみれば、一日経ったという事実を得るだけでも、自分がこの世と繋がっているという微かな喜びを味わうことが出来るのであるが、彼の我田引水は、彼自身によって打ち砕かれてしまった。

（なぜ、そう言える？　一日経ったと？　どこにそんな証拠がある？）

確かに田中は猜疑心の強い男だったが、さすがにこの時ばかりは冷静さを取り戻したと言ってよかっただろう。そして、彼は自分の楽観を後悔し始めてさえいた。

彼の意識が明確さを保していたことは言うまでもない。彼が自分の根拠の無い考えを自分で処理することが出来た、ということがそれを証明していた。しかし、それは彼を落胆させた。彼にとっては、自分の頭が混乱しているほうがよっぽど都合がよかった。なぜなら彼は、自分の体に訪れている今の現実を受け入れ難いものだと感じていたし、その現実から目をそらすにはある程度の理性の喪失は必要だったからだ。

その彼の考えは全く正当なものだった。六畳一間の小さな部屋の中で、彼の体は浮いていた。その視線は真っ直ぐに眼前の台所を捉えていた。錆が混じったステンレスの台

所で、水道の蛇口から水が糸のように降下していた。そして台所の上を一匹の黒い虫が旋回するように飛んでいた。その虫の動きを見続けるのは田中にとって苦痛だったが、彼は台所から視線を外すことが出来なかった。眼球は何度力を注入しても微動だにしなかった。

これだけでも彼を動揺させるのには十分だったが、異常は体中にあった。いや正確に言えば、彼の体の全てが彼の意思による統率を拒んでいた。頭部、手、足、そのどれもがずっと硬直したままだった。

（このような状態に慣れることなど出来はしない。もうずっと体の感覚が無いままだ。もし……、もし一日経ったと仮定してみると、これは最悪だ。そしてこのまま行くと一体どうなってしまうのだろう。分からないことだらけだ）

田中は今の状態を独力で改善する見込みが無いことに薄々気付いてはいたが、もしかしたら他者の力を借りれば何とかなるかもしれないとも思っていた。だが自分の体をまともに動かすことが出来ない彼にどうして他者を呼ぶことが出来ただろう。声を出すことも不可能なのだ。彼の口は半開きになったままで、上下の歯は舌をがっちりと挟んでいる。しかも肉を食いちぎるくらいの力がそこには残存している。

そして悪いことに、田中は部屋のドアと窓を締め切っていた。加えて玄関のドアには二重に鍵をかけていたし、窓に関しては間隙無くカーテンを覆い被せていた。

しかしそれらの外部の状況が生む不可抗力よりも絶望的だったのは、彼の部屋を訪ねる人間が抑々（そもそも）いなかったということだった。いや、皆無というわけではなかったが極度に限定されていた。しかしその限定された人間とも田中は疎遠になっていた。

彼はその限定された人間のことをふと考えた。その人間のことを嫌悪しているにもかかわらず、なぜかその人間のことに思いをやった。そして当然不愉快な気分になった。

（こういう感傷はよくない。いや、感傷などではない。抑々、俺にとってたいした人物ではないだろう。いや、誰にとってもたいした人間ではないが。年老いた母親、そして今は老人ホームの老婆でしかない）

限定された人間とは田中の実母なのだが、彼は何年ぶりというくらいに彼女のことを思い出したのだった。それぐらい彼の頭の中から彼女の存在は長く消えてしまっていた。両者の関係は映画の脚本になるような劇的なものでは当然なく、平凡を極めたものだったが、なぜか田中は実母のことを昔から忌々しく思っていた。正しく言えば彼女の個性ゆえにそう思っていたのではなく、彼女が自分の母親であるということ、つまり自分に母親がいるという事実が気に入らなかっただけなのだ。

彼は他者の来訪を望んでいる自分に失望し始めた。今の状態をもたらしたのは、ほかならぬ自身の決断によるものだった。彼は今の状態を望んでいたはずなのである。ところが今や彼は、誰か他の人間が助けに来てくれないだろうかと陰に期待している。田中が自分を恥じるのは、人間としての最低限の誇りのようなものがまだ彼の心に残っていたからかもしれない。

とはいえ、意識は連続していた。そして肉体は動かすことが出来ない。そのような状態においては、人間は必然的に五感を働かせることに執心するだろう。田中は耳をそばだてていた。彼の聴覚はまだ、視覚と同じく奇跡的にも生きていた。彼は隣人の部屋との間に設けられた壁の方に、左耳の神経を尖らせていた。

壁の元の姿は純白だったのだろうが、年月の経過によって褐色へと染まってしまっていた。田中がこのアパートに引っ越してきた時から、そのような色だった。また褐色の中には点々と赤や黒や緑などの多様な色素が混在していた。田中自身が不注意で付けてしまったものもあったが、ほとんどが以前の住人たちの手によるものだった。

壁の向こう側には田中と同じ独身の男性が住んでいた。田中よりも長くこのアパートに住んでいるようだった。田中はその隣人とは四、五年近く隣同士という関係にあるのだが、彼と口を利いたことがついぞ無かった。顔を合わせたことは確かにあった。まだ田中が失職する以前の折で、いつもよりも早い時間帯の勤務が予定されていたため、田中が汲々として玄関のドアを開けた時、水色の上下の作業服の隣人が、丁度自転車のサドルに尻を付けようとしていた。田中は隣人に気付かれないように部屋の中へ引っ込もうと思ったが、隣人は田中の気配を察知したのか、田中の方に視線を向けた。互いに気持ちの籠っていない会釈を済ませた後、隣人は田中から逃げるようにして両脚を速く回転させつつその場を後にした。これが田中と隣人の初対面の一部始終だった。爾後、何度か出くわしたことはあったが、最初に対面した時に行われたような会釈が繰り返されるばかりだった。

田中は隣人の容姿を忘れてしまっていた。最初に会った時の隣人の服の色素だけが、何故か記憶にしっかりと留まっていた。

（一体どのような仕事を彼はしていたのだろうか？　作業服ということは、直接肉体を使う仕事かもしれない。だとしたら、俺が前に従事していた職種と似ているというわけだ。まあ、確かにこのアパートだ。精神を酷使する仕事ではないだろう。賃金に関しては気になるところだが……）

田中は不快を感じた。かつての自分の仕事の待遇の悪さが思い出された。

（俺が解雇されたことは何よりも俺にとってよいことだった。全くだ）

そうして少しの間、田中は自分の過去を呪詛していたが、突然彼の左耳は隣の部屋からの音を捉えた。彼ははっと我に返った。

同じような音が続けて三度ほど起こった。それは明らかに人の足音だった。仕事を終えて帰って来たのだろうか。あるいは起床の直後か、それとも雑事の開始の合図か。そのような推察は全く無意味だった。しかし、田中は自分の体が動かなくなって以来、初めて孤独が和らいだような気がしていた。これまで警戒感を抱いていた他者という存在が以前から求めていたもののように思われた。そして、そのような心情になっている自己を不思議に思った。忌まわしいはずの隣人の生活音は、緊張や不安を伴うことなく田中の心を高ぶらせているのだった。

（彼は、今、俺の隣にいる。ということは、彼が俺を救助してくれる可能性がまだ残っているということだ）

だが、田中はすぐに冷静になった。というのも、この絶望的な状況を隣人が打開することがあるとしたら、隣人が犯罪行為をなすことを意味していたからである。しかし、隣人の面貌が田中の部屋の窓ガラスを割って侵入するような類のものではなかったような気がしたし、また隣人が仮にそのような類の人間であったとしても、その犯行が運よく訪れる期待は薄いものに違いなかった。

（あのアパートの隣人だけが住人ではない）

しかし田中はそう思った直後に、アパートの住人が助けに来るという想像に嫌悪を感じた。僅か六部屋しかないこの小さな建物においては、空間的な連接があっても、その中に居住している人間関係は完全に遮断されていることを思い出したのだ。いやしくも田中の死体を住人の誰かが発見したとしても、救助されるよりは黙殺される可能性のほうが高いようにも彼には思えた。

彼は部屋の一隅に置かれているはずの、ある一冊の書物の内容を記憶から引っ張り出した。

（確か、あの本は現代文明におけるコミュニケーションの問題について論じていた。現代人は強迫的な何ものかの作用によって、物質的・肉体的な連結を強制されていると。その何ものかは、牢獄を全て監視できるような位置に座していて、我々一人ひとりを狭小な空間に閉じ込めつつ、隣接させ、そして、我々がお互いを憎悪しあい、嫌悪しあう光景を見世物のように楽しんでいると。

そして、こうも言っていた。人間が自殺する理由は常に他者である、と。完全な絶対の孤独では、人間は死なないように出来ていると。他者の言葉、臭い、行為、音、それらのものが、常に一人の人間の自殺について、大なり小なりの影響を及ぼしている、と……。しかし、しかし俺は誰

かに殺されたわけではないのだ。自分で自分を殺したのだ。幸福な死というやつだ）

田中は自分がなぜ今のような状態に至ったのかが、改めて理解できたような気がした。そしてたとえ自分の死に誰かが関係しているとしても、彼は怨憎を抱けなかった。自分の首に縄を巻き付けた時、彼の脳中にあの本の思想の断片は残存しているはずだった。しかし彼は死ぬ瞬間、他者に対する敵意よりも自分に対する敵意、そして不可思議な罪の意識が生起したのを感じたのだ。自分がこの世界に生まれたことを誰かに対して謝罪したいような奇妙な感覚の中、彼は絶命したのだ。否、したはずだったのだ。

そして死んだはずの彼は、まるで最後の瞬間に発生した意識が生残したかのように他者に対する強い期待を持っていた。つまり、彼が呪っていたのは現実に生きている他者ではなく、この時代と国であり、また本来なら共に顔を見せ合いお互いの状況を時折確認し合いながら、なおかつ一線を引いて夫々の静穏な生活を過ごしていくはずの自然な生活環境を剝奪している、このアパートの部屋の壁に対してだったのである。

（こんなにも近くにいながら、我々は離れていなければいけないのか。同じ日本人なのに！）

田中はこれまでの自分の孤独と虚無に満ちた生活を思った。それは不穏な快楽であり、また穏やかな絶望でもあった。労働し、食事をし、排泄をし、時折書見し、執筆し、睡眠する。この回転の中で、彼の青春と余生は磨滅し続けてきた。どれだけ彼がその回転に対して深い疑念を抱き、時世を心中で悪罵しても何も変化することはなかった。どのような生活の刺激も、彼の生と意識に彩色することはなかった。そして彼にとって最も苦痛だったのは、その回転が自分から死を遠ざけているように感じられたことだった。他者を手に入れるためには死を得るしかないという不合理な観念を彼は夙に持っていた。彼にとって死はアパートの隣人との間にある壁を取り壊すことすら出来るほどに、無際限の可能性を持っているものだった。

（あの時、俺は全ての可能性を死に賭していた。だが、今はどうだ。死の可能性さえもが奪われたのだ）

田中は体の全ての力を注入するような意識でもって両手を握りしめようとしたが、彼の指は一本も動きはしなかった。そして落胆を身振りであらわすことさえ出来ず、胸中ではただ苦痛が高まるばかりだった。

突然、窓が開けられる音が彼の耳に入ってきた。それは明らかに隣人の行動によって引き起こされた音だった。

（窓を開けたのは換気のためか？　だとしたら、やはり帰宅したばかりなのだろうか？）

隣人はその後何かの作業を始めたようで、聞き慣れた多様な物音が次々とガラス越しに彼の耳に入ってきた。

（洗濯物を干している音だ）

田中は我知らず希望を抱いていた。というのも、彼は自分の体から発せられる臭気が、隣人の鼻を刺激するかもしれないと感じたからだ。確かに部屋の窓もカーテンも閉じられていたが、肉体の臭気が微小な隙間を通って漏出し発見されるという可能性は大いにある。隣人がベランダに出ている今が、自分が発見されるための最後の機縁であるかのように、彼は隣人が隣の部屋の異変を察知してくれることを強く祈った。

隣人が発する物音は続いた。洗濯物を干し終えたのか、次は、金属やガラスが衝突する音が彼の耳に聞こえてきた。

（そうだ、彼はベランダに大量のビンや空き缶を袋に詰めて置いていたはず。その音をずっと俺は聞いてきた）

次に、ビニールの袋が空気を切る音が生じ、恐らくその袋の中に、物質が乱暴に放り込まれていると思われる激しい音が響いた。

（これで終わりではないだろう。まだ、ベランダでやることがあるはずだろう。例えば、布団を干したり、それから、それから……）

次の瞬間、絶望的な意味を持つ音が彼の思考を遮断した。それは窓を激しく閉める音だった。隣人はどうやら一連の作業を終えて、部屋の中へ戻ってしまったようだった。田中の死が隣人に知られる可能性は、再び小さくなった。

その後、隣の部屋は静かになった。

（眠ってしまったのだろうか？　眠るために、窓を閉めたのだろうか？）

田中は温度を感じていない自分の体について考えた。

（恐らく、外は冷えるのだろう。日は既に沈んでしまっていて、夜気が漂っているのだろう。カーテンさえ全開にすることができれば、あるいは、俺の体が窓の方に向いてさえいれば、今の時間帯を推測することは出来るのだ。どうして俺の体は動かないのだろう？　意識は明確に生きているのに、この体は死んでしまっているのだ）

田中は別に目の疲れを感じているわけではなかったが、瞼を下ろそうとした。しかし彼の静止したままの眼球がもとより被覆されることはなかった。

（この体はまだ俺のものなのだろうか？　そう自分で思い込んでいるだけではなかろうか？　それにしても、俺は一体いつからこの状態になったのだろうか？　いや、少なくとも、意識と思考は何も変化していない。変化しているのは、俺の硬直した体だけなのだ。体の硬直は必ずしも、死を意味しているわけではない。俺の心臓はもしかしたら、まだ動いていて、正に誰かが俺を発見すれば、本当の意味での救助になるのかもしれない。つまり一命を取り留めることが出来るかもしれない。しかし、俺は……）

田中は、視界に映っている玄関の方へ意識を向けた。

（俺は本当に助かりたいと思っているのだろうか？　それに抑々なぜ俺は今、体を動かすことが出来ないのだ。それは俺の首に巻き付いているロープのせいだ。では、このロープを俺の首に巻き付けた者は誰だろうか。それは俺自身だ。俺が選んだ結果なのだ。なぜこの際、命が助かることが重要だろうか。命はどうでもいい問題だ。俺は自分が死んでいることを望んでいるはずだ）

突然、猫のけたたましい鳴き声が外から響いてきた。田中の心音が一瞬高くなった。

（今、俺が望むのは俺の死体が発見されることだ。ただ、それだけだ。肉体が消滅すれば意識も消滅するはずに違いない）

もう一匹の猫の鳴き声が被さった。二匹の猫は争いを誰かに知らせるように、威嚇の声を発し続けていた。

（動物は鼻がいいはずだから、俺の肉体の臭気を感じ取っているかもしれない）

二匹の猫の合唱はどうやら長引くようだった。田中はこの周辺に多数の野良猫が棲みついていることを知っていた。争闘なのかじゃれ合いなのか聞き分けられないその鳴き声を何度も耳にしていた。そのたびに彼はいたたまれない気分になり、時には外に出て、その声を発する猫たちを追い払うために探索する児戯をおかしたこともあった。何より彼は少時から猫が嫌いだった。しかし今、その嫌悪は静まっていた。

（以前、俺が部屋のドアを開けた時に、足元に猫がいたのを覚えている。確か、その猫は俺の部屋に入ろうとしたはずだった。恐らく俺の部屋の中から食物の臭気が漂っていたのを感知したのだろう。だとするとあの猫たちも、俺の部屋が開くのを期待して、玄関の前やベランダで待機するようなことがあるかもしれない。そうなれば、その光景を目撃した人間がそれを不審に思って……）

田中は首を振りたかったが、彼の筋肉はやはり全く反応しなかった。

（そんなことは奇跡だ。もはやありえないことだ）

二匹の猫の鳴き声は高調した。肉体的な衝突が開始されるかのようだった。田中は耳を澄まし、その瞬間を表現する悲鳴を待ったが、しかしそれは来なかった。そしていつの間にか二匹の猫の鳴き声は、まるで世間話でもしているかのように小さくなってしまっていた。

しばらくするとその小声さえも聞こえなくなった。

彼は、実はこういった結末を予測していた。というのも猫の威嚇が喧嘩に直結することがほとんどないことを実は知っていたのだ。猫たちにとって威嚇は争闘でもなければじゃれ合いでもなく、ただの贅語（ぜいご）としての意味しかもっていなかった。動物がその肉体に衝撃を受けた時に発するあの瞬間的な悲鳴を、猫の威嚇の後に聞いた経験を彼は持っ

てはいなかった。

静寂は田中の心を暗然とさせた。猫のくだらない耳語（じご）は彼の気を紛らわしてくれるに十分なものだった。無音の世界は彼の意識を眼界に集中させた。彼は目の前の光景に対して何らかの変化を見つけようとしていた。そうすることで、自分がこの世界と連結しているという事実を再確認しようとしていた。

だが彼の視線は部屋の中に何の変化も捉えることは出来なかった。一人の男の侘しい生活の世界だけが厳然として静止していた。それは彼に、過去の生活に対するむなしい想起を強いた。

（一体いままでの生活で人間に与えられた最低限の喜び、あるいはその断片でも俺の生活に転がり込んで来たことがあっただろうか？　俺の部屋に人生という色素は塗布されていただろうか？　何もなかった。みじめなくだらない労働、ぎりぎりの生活、圧倒的な孤立……、ただそれだけだ。しかし俺はそれを憎んだことがあっただろうか？　もし、俺がこの生活から脱出したいと強く願っていたならば、俺はこの部屋にいなかったはずだ。実は、俺はその生活が気に入っていたのだ。打ちひしがれたこの自分とこの生活を愛していたのだ。俺はそれを自分の意志で選んだわけだ）

しかし、目前の生活の光景に対する愛情を彼は抱けなかった。というのも今の彼は、自分の生活を他者の目線で見ることが出来ていた。それは疑いなく今の彼が置かれている特殊な状況が齎（もたら）したものだった。

（改めて見ると何という生活空間だろうか。非運の内在する空間だ。これは俺の存在のスケッチのようなものだ。やはり、俺はこうなる運命だったのだ。しかし存在は終わっていない。なぜだ？）

田中は自分がどうやって今のような身体の状況を招来したのかを整理してみることにした。それは、記憶を掘り起こすという作業を意味していた。

（そうだ、俺は自分を殺すことを解雇された後に決意したのだ。生活の崩壊、そしてそこから発する法の抵触という生の形態を、俺は拒否したのだ。俺にもまだ善悪の観念は残っていたわけだ。否、違う。俺はただもう生きたくないと思ったのだ。存在を、意識を殺してしまいたかったのだ。だから、俺は自分を殺すことにしたのだ。

職場で最後の挨拶をする時に、俺は感じていた。同僚たちが、いつにもまして俺のことを哀れな目で見ていることを。彼らはいつもそうなのだ。俺が奇異な人間であるということに、彼らは俺が入社した時点で感づいていただろう。

確か職場を後にして、どこかのレストランにそのまま足を運んだ。一人で暮らし始めてから外食などしたことはなかった。最後の晩餐にと、思い切ったのだ。勿論、安いレ

ストランだったが。

俺は何を注文しただろうか？　確かハンバーグステーキだったような気がする。俺の生活の中では肉食は禁則だった。菜食主義者だったというわけではない。ただ家計を考えただけのことだ。しかし今の時代、外国製の肉が売っているから、実はそこまで心配せずともよかったのだ。こういった誤解が、俺の人生の方向性を決定してきたのかもしれない。

まあ、それはいい。そう、安いレストランだった。客はほとんどいなかったような気がする。確か夜九時くらいだったから、丁度客が離れていく時間帯だったのかもしれない。俺はハンバーグステーキを注文するまで、メニューを見ながらかなり迷ったものだ。最後の晩餐と言いつつも、俺はなぜかやはり廉価な商品に視線を奪われていたのだ。これは俺の生活形態が齎した習癖だっただろうか？　それとも俺が生得的に吝嗇（けち）だったからだろうか？　いや、それはいいのだ。とにかく、俺は迷ったのだ。一体何十分時間を使っただろうか。確か店員が俺を訝しげに見ていたのに俺は気付いた。それで俺は結局、俺自身の意向ではなく、外部に突き動かされるような形で店員を呼んだのだ。そして実は心中で注文するものを決めていなかったのだが、店員にこれ以上怪しまれてはいけないという焦りから、ハンバーグステーキとライスが写った写真に食指を動かしたのだ。価格はどれくらいのものだっただろうか？　確か千円を少し超えていたような気がする。俺にとっては高級品だった。多少の後悔がなかったわけではない。しかしこれは最後の晩餐なのだ、と俺は自分に言い聞かせた。

中年の男性の店員は、外貌に似つかわしくない高い声で、注文内容を復唱した。俺はメニューを店員に渡した。店員は厨房へと戻っていった。

俺は四角い氷が浮かぶコップから、冷水を口に注いだ。ハンバーグステーキを最後の晩餐にしたことは不料簡（ふりょうけん）だっただろうか、と性懲りもなく自問し続けていた。

十分も経たないうちに料理が来た。先ほどの中年の男性の店員は、片手にハンバーグステーキとライスの二枚の皿を器用に持っていた。彼は最後に伝票をテーブルの上に置いて、『ごゆっくりどうぞ』と言うと、足早に戻っていった。その店員の一言は俺を安心させたような気がする。確かにサービスというのも決して悪くはない。たとえそれが空疎で形式的なものであったとしても。しかし本来の俺だったら、そのような一言に慰撫されるようなことはなかっただろう。自分の生の最後の瞬間が近づくのを感じている時においては、生身の人間が自分だけに発したつまらない言葉さえ有難いものに感じられたのだろう。

俺は決して食欲が高じているわけではなかったし、焼かれた肉の香気に鼻孔が刺激されてもそれは変わらなかった。